

人は何のために学ぶのか。学ぶことは、働くことと無縁ではない。それどころか知識社会といわれる現代においては、学び続けなければ、社会の一隅を照らし続けることはできない。

21歳までに学んだことは5年から10年で陳腐化し、新たな理論、技術、知識と代えるか、少なくとも磨かなければならなくなる。『イノベーションと企業家精神』

では、社会の役に立ち続けるためには、何を学んだらよいのか。働く人の労働寿命は50年を超え、組織の寿命が30年に満たないという現実、一生のうちにいくつかの組織を移りながら働き続けることを意味する。

これまでは、「就社」によって役割が与えられ、定年までそれを全うすることができた。その会社や業界特有の知識やスキルを身につけておくことが最も生産的に仕事を行う秘訣だった。

しかし、働く者の労働寿命の方が長い現代社会においては、就社ではなく「就職」—どんな職に就くのか—という意識をこれまで以上に強く持って働き続けることが求められる。そのためには、他でも通用する知識やスキルはもちろん、常に環境の変化を意識した新たな知識やスキルの習得も不可欠である。

一人ひとりの人間が、自らの継続学習、自己啓発、キャリアについて責任をもたなければならなくなる。『イノベーションと企業家精神』

社会の役に立ちたいという覚悟のもと選んだ「職」を意識し、自らの責任において知識やスキルを学んでいても厳しい現実が待ち受けている。

知識社会では、成功が当然のこととされる。だが、全員が成功するなどということはありません。『明日を支配するもの』

知識社会では、仕事での失敗や挫折と隣り合わせである。その結果、正当な評価を受けず不遇のときを過ごすこともあるかもしれない。しかし、失敗や挫折が人を成長させるのも事実である。

信用してならないのは、決して間違いを犯したことがない者、失敗したことがない者である。そのような者は、無難なこと、安全なこと、つまらないことにしか手をつけない。『マネジメント』

失敗や挫折は、人の能力を高め、器を磨き、人物を本物にするために天が与えた試練である。労苦に耐え、乗り越えた者だけが真のリーダーたり得る。そのために必要なものは、不断の学びである。しかしそれは、業務知識やスキルなどを習得することではない。これらの学びは、末学と呼ばれる。本学と呼ばれる「人間学」を学ぶのである。人は「教え」によって人となるという。

というわけで、生き方、人生論、哲学、幸福論、人間学を学び始めて、早14年となる。人間修行である。日々、修行である。現実、なかなか思うようにはいかない。常に反省の日々である。自己開発とは、学びを深め、実践することである。それは己の気質を変える自己修養のプロセスでもある。まだまだ道半ばである。